

チリ・ウルグアイ・アルゼンチンへの 経済ミッションに参加して

工藤 章

はじめに

日本商工会議所の率いるミッションに、ラテンアメリカ協会専務理事としてメンバーに加わり、3か国を訪問した結果を下記の通り報告する。1992年よりほとんどの会議に参加してきたが、今回はこれまで以上にラテンアメリカ諸国の日本への期待が大きいことを認識させられた。その理由の一つとして、安倍首相の去年7月～8月にかけての中南米・カリブ諸国歴訪が挙げられる。訪問を受けたチリだけでなく、訪問を受けなかったアルゼンチンとウルグアイからも首相訪問の成果を高く評価する発言が多かったからである。また、今回のミッション派遣もそのフォローアップという点で、時機を得たものと言える。

日智経済合同委員会（2014年12月2日）

1979年に東京で開催され、その後ほとんど毎年、開催地を日本とチリで交互に開催してきた本委員会は、今回はサンチアゴに於いて29回目の会合となった。（昨年仙台で開催されるとともに、委員会参加者も式典に加わりモアイ像が南三陸町に寄贈された。）委員会開催の前夜に、ミシェル・バチエ大統領がモネダ宮（市内中心部にある大統領官邸）に両国代表団を招いてレセプションが開催された。チリで開催される委員会で

は、このような政府の配慮がされることが通例になっているが、今回は、晩さん会終了後に日本側からの参加者全員の一人一人と記念写真を撮るという過去に前例のないサービスがあった。大統領が参加者と握手を交わしにこやかに写真に納まる光景は、チリの日本への期待を象徴するようだった。

会議には両国から150名を超える企業関係者が参加したが、9時から18時まで熱のこもった講話と質疑応答が展開された。

（1）開会式で、ロベルト・デ・アンドラカと佐々木幹夫両委員長の挨拶のあと、ヘラルド・ムニョス外務大臣が大統領の祝辞を伝え、二階尚人駐チリ大使が安倍晋三総理大臣の祝辞を代読した。その後、アレハンドロ・ミコ大蔵省次官がチリ経済状況を説明した。チリは、政治も経済も安定しており、制度も明確であり、海外の投資家に大きな機会を提供している。今後2020年代に先進国入りすることを目指す上で、官民が協力することが強調された。官側の人不足でインフラの整備の上での手続きが遅い、民間に比べると女性の管理職が少ないなどに触れて、これらの問題点に積極的に取り組むとの具体的な施策も提示あり、チリのさらなる発展が確実なものと感じた。

（2）第1回全体会議では、両国のエネルギー事情や



日智経済合同委員会 佐々木日本側委員長の開会挨拶



日智経済合同委員会 第3回全体会議

高いエネルギー・コストなどに付き、将来の電力需要の伸びに対する方策が議論された。日本側からは三菱重工業の新技术が紹介され、チリ側からは水力、石炭、石油・ガス、新エネルギーにより、2020年には24,000MW、30年には30,000MWに達する電力需要に対する戦略が説明された。この計画に対し石炭のガス化発電や地熱発電などの日本の技術の導入が期待できる。

(3) 第2回全体会議では、環太平洋パートナーシップ協定(TPP)と太平洋同盟について議論された。チリ側からは、TPPに日本が交渉に加わったことで日本・米国が軸になり協定の位置が高まったこと、太平洋同盟では日本がオブザーバーに加わっていることによる効果として、インフラ投資、新技术の移転、中小企業の参画などが挙げられた。一方、日本側からは、この二つの統合プロセスが成功すると、両国間の貿易と投資に新たな推進力を与え、新たなビジネスチャンスが生まれることが説明された。チリが日本の積極的な対応を期待していることが強調されたセッションであった。

(4) 第3回全体会議では、主要産業における現状と将来が議論された。鉱業資源については、コデルコ社(銅公社)とJX日鉱日石金属(株)の具体的なプロジェクト、インフラストラクチャー整備については、チリ公共インフラ業協会とアグアス・ヌエバス社(丸紅)から説明があり、チリ・アルゼンチン鉄道連結についてアコンカグア・トンネル、さらにチリ農業大臣と日本水産(株)から農業・水産分野について説明があった。鉱山開発における問題点として、若い労働力の不足、水資

源の不足、電力の確保とコストの上昇、環境認可取得の難しさ、が指摘された。また、アンデス山脈で分断されているチリとアルゼンチンをトンネルで結び、アジアと南米の間の物流を画期的に改善するプロジェクトが着々と具体化に向けて進捗していることは注目される。

今回の会議を通して、日本とチリが新たな関係構築の段階に入ったと感じた。2011年には日本はチリへの投資受け入れ国の1位になり、12年は2位になったものの、13年に再び1位になった。日本はチリにとって重要な経済的パートナーとなっている。そのような関係を活かし、今後は環太平洋地域の政治経済関係の構築や、メルコスールのアジアとの関係強化の橋渡し役として、両国が協調することが世界的に重要な役割を担っていると思われる。また、チリが推進している、電力、港湾、などのインフラの充実、教育制度改革、などにおいて日本が果たす役割も大いにあると考える。なお、二重課税防止協定の早期締結が望まれる声が多く聞かれた。

日本ウルグアイ経済人会議(2014年12月3日)

1987年に第1回の会議が東京で開催され、前回の会議から11年ぶりに今回の12回会議が実現した。直前の11月30日に行われた大統領決選投票で与党のバスケス前大統領が勝利した直後ながら、政府のトップが出席するとともに両国から100人超の参加者を得て活気のある会議となった。

開会式で、ラウル・R・パラシオス在ウルグアイ日本商工会議所会頭、佐々木幹夫団長、田中径子駐ウルグアイ大使の挨拶のあと、ロベルト・クレイメルマン・エネルギー・工業大臣の基調講演があった。日本との投資協定が合意に至り、今後、日本からの投資が増えることを期待する。南米で最も民主的で安定した政権により、2003年からプラス成長を続けている国である。世界銀行の本年初めの調査では、中南米で第1位のビジネス環境にあり、もっとも汚職の少ない国である。また教育レベルも高いので良い労働力を有しているので、付加価値の高い商品の輸出が伸びているとの説明があった。また、ポルト外務大臣代理(新政権の経済



日本ウルグアイ経済人会議 佐々木ミッション団長の開会挨拶

大臣に就任予定)からは、日本から20社の進出を受けていることを評価する、投資に対し種々の優位性があるが、国が小さいので南米でのビジネス展開のトライアルをするのに適した国であるとの指摘があった。

第1回全体会議「ウルグアイの産業と投資機会」では、ウルグアイへの投資を促進させる施策が説明され、日本側から日本貿易振興機構(JETRO)の取り組みとLNG輸入事業及びペットボトル・フィルム製造の具体的な案件が紹介された。第2回全体会議「ウルグアイにおけるフリーゾーンからのビジネスの優位性」では、ウルグアイ側からフリーゾーン(FZ)の現状説明があり、日本企業として実際に進出しているリコーのオペレーションについても詳細な説明があった。1987年に制定された法律により現在は12か所にFZがある。約2.8億人の人口を有するメルコスールの大きな市場の物流ハブとしての機能があり、その中で最大のFZであるソナアメリカについても説明があった。米国、ヨーロッパ、アジア、南米の約350社が拠点を置き、約1万人の雇用を生んでいる事業の成功には驚かされた。翌日、そのソナアメリカFZを訪問した。メルコスールを含む南米諸国への物流ハブとして機能する現場を視察できたことは有意義であった。

今回の経済人会議では、ウルグアイ側の経済界の日本への期待の大きさに圧倒された。既に20社の日本企業が南米の物流センターを置いているが、政治経済の安定性、教育レベルの高さ、地理的有利性などを考慮し、多くの企業が同国を見直す必要があると認識した。また、ハブ機能の向上のためのインフラ整備への日本企業のチャンスも大きいといえる。

日亜経済合同委員会(2014年12月5日)

チリとの合同委員会の設立の13年前の1966年に、第1回の会議が東京で開かれた歴史のある会議である。今回は23回目の開催だが、前回22回が2010年に東京で開催され、前々回の21回会合がブエノスアイレスで06年に開催されたことでもあり、久しぶりのアルゼンチンでの開催となった。本委員会として過去最多の200名を超える参加者で、会場が埋まったのには驚いた。

カルロス・デ・ラ・ベガ アルゼンチン商工会議所会頭、アンヘル・マチャードと佐々木幹夫両委員長、水上正史駐アルゼン

チン大使の祝辞の後、ジョルジ工業大臣が第1回全体会議での基調講演を行った。ホールドアウト債権者との問題解決には未だに苦労しているが、本年5月にパリクラブに於いて懸案であった債務繰り延べ交渉が纏まり、7月には返済が始まった、03年から10年の間に経済発展を続けていて、特に輸出は3倍になり、着々と再工業化が進んでいるとの報告があった。また、この間にトヨタの大規模投資があり、これは対外的な宣伝効果もあり、国として高く評価しているとの発言があった。農産加工品、リチウムなどの鉱物や工業製品の輸出、エネルギー分野でシェールガスを中心にした自国生産による輸入の削減、インフラの充実(アコンカゲア・トンネルプロジェクト、など)に今後注力するとの将来への展望が説明された。

第2回全体会議「両国経済の現状と展望」では、アルゼンチン側より2015年は外部環境にもよるが0.5%のGDPプラスが見込めるとの明るい見通しであるとの説明があった。ただし、懸念材料として世界的な商品価格(特に大豆)の下落傾向、ブラジル経済の停滞、エネルギーの輸入拡大が挙げられた。第3回全体会議「メルコスール域内のビジネス展開」では、アルゼンチン製トヨタ・ピックアップがブラジルのみならず中南米各国に輸出を増やしている状況が説明され、第4回全体会議「アルゼンチンのエネルギー資源」では、シェールガスと再生エネルギーの開発についてアルゼンチン側より発表があり、第5回全体会議「金属・鉱物資源とインフラ」においては日本側よりリチウム開発および情報通信技術(ICT)活用による社会基盤充実プロジェクトが説明され、アルゼンチン側よりチリと同じ



日亜経済合同委員会 佐々木委員会会長の開会挨拶

く「トランアンデス・トンネル計画」の案件概要説明があった。

1898 年より日本と緊密な関係があり、農業・牧畜・水産、金属、エネルギーが豊かであるとともに高い工業力を持っているアルゼンチンは、日本にとって重要なパートナーであることは間違いない。アルゼンチン側からは一様に、現政権が政経運営に苦勞しているが、来年の政権交代でアルゼンチンが良い方向に向かうとの発言があった。したがって、日本はその潮流に乗り遅れないように、今から同国への進出準備を怠りなくすべきと考える。

おわりに

資源と人材の豊富な南米のなかでもチリ、アルゼンチン、ウルグアイ、はそれぞれに特色を持った国々である。日本から最も遠方に位置する地域であるが、今後さらに経済的関係強化が図れる余地が大きく残っていることが、今回の一連の会議で明らかになった。また、二国間の経済交流の上で、この経済合同委員会と経済人会議の果たす役割は大きいので、引き続き継続されることを期待したい。

(くどう あきら ラテンアメリカ協会専務理事・事務局長)

ラテンアメリカ参考図書案内



『チューリングの妄想』

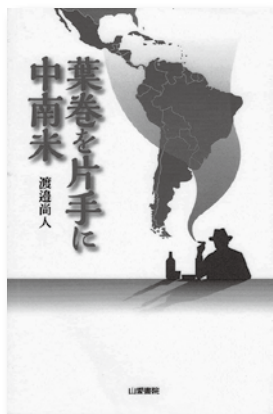
エドゥムンド・パス・ソルダン 服部綾乃・石川隆介訳 現代企画室
2014 年 8 月 538 頁 2,800 円+税

ボリビアの暗号分析専門秘密組織である国家諜報機関の有能な暗号分析官だったサーエンスは、部内では英国暗号解読者でナチス・ドイツのエニグマ暗号解読に大きく貢献したチューリングの名で呼ばれている。ブラック・チェンバーと呼ばれるこの機関は CIA のボリビア駐在から転じたアルベルトが政府に創設を働きかけ初代長官になったが、今はサイバー攻撃に対峙する組織に変えるため、米国の NSA (国家安全保障局) から招聘されたグラハムが継ぎ、チューリングは閑職に移されている。娘のフラビアは高校生ながら趣味のコンピュータ知識を駆使して一人で「トード・ハケル」(All Hacker) という自分のサイトを公開している。

舞台は著者の故郷ボリビア第3の都市コチャバンバと思われるリオ・フヒティエボで、1971 年から 7 年間の長期独裁を行い 97 年に再び大統領に就き新自由主義経済政策を行ったバンセル將軍を思わせるモンテネグロ大統領の下で行われた電力公社民営化で獲得した米・伊資本のグローバックス社が買収 1 年後に過酷な電力料金引き上げを打ち出し、激化した市民、労組、農民組合が結集して道路封鎖など抗議運動が激化していく騒然たる世情の中で物語りが展開する。

抗議運動と並行して政府機関や多国籍企業のサイトに侵入して混乱させる集団の中でもカンディンスキーを中心とする若者達のハッカーと、フラビアを雇い入れ犯人捜しを行うグラハム率いるブラック・チェンバー、独裁政権下で組織の暗号連絡文を解読され捕らわれ惨殺された従姉の復讐にアルベルトとチューリングの殺害を誓うカルドナ判事などが絡む。実はアルベルトはサーエンスが暗号解読者として有能なるが故にチューリングと呼んだのではなく、仕事だけが関心事でその成果が政治的にどう使われるか無関心を揶揄してのことであつたことも示唆される。

この抗議騒動も、99 年に世銀の指導で行われたコチャバンバ市営水道公社の民営化で、唯一応札し手中に収めた米国ベクテルの子会社が行った水道料金値上げと井戸・灌漑利用料徴収に抗議したコチャバンバ水戦争を彷彿させる。抗議運動の中でコカ栽培農家連合からそのエボ・モラエス指導者が後の大統領候補になって行くのだが、こういった背景も知っていると、暗号解読やハッキング、ハッカー捜しを主にしたテクノスリラー小説としてばかりでない面白さもある。〔桜井 敏浩〕



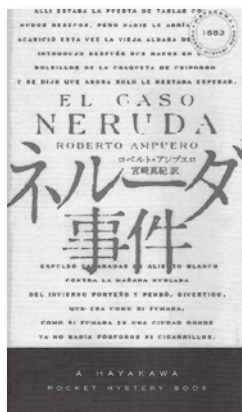
『葉巻を片手に中南米』

渡邊 尚人 (公財) たばこ総合研究センター制作 山愛書院発行・星雲社発売
2014年9月 249頁 1,500円+税

日墨学生交流計画により外語大スペイン語科学生時代にメキシコへ留学した時に出会い、外務省入省後30余年間にスペイン、ベネズエラ、二度のニカラグア、ブラジルのリオデジャネイロ、米国のフロリダ、エクアドルなど、そして現在はウルグアイに在勤している著者が常に愛し続けている葉巻の魅力、名産地と製作方法、喫煙を通じて得た交流などを中心に、豊富な各地の知識をもって中南米を紹介している。

「葉巻巡礼」は、在勤した各地での葉巻探求とキューバやニカラグアなどの本場の製作状況とともに、それぞれの国の国土、歴史、社会、政治、経済の概況を述べ、著者の関わった外交活動にも触れている。「葉巻の手引き」は、葉巻の歴史、葉巻作りの工程、高級葉巻をめぐるエピソード、嗜み方を語り、「様々な嗜好品」では、パナマ・ハット、コーヒー、ラム酒、マテ茶、テキーラ、ワインの魅力を取り上げている。

〔桜井 敏浩〕



『ネルーダ事件』

ロベルト・アンブエロ 宮崎真紀訳 早川書房 (ハヤカワ・ミステリ)
2014年5月 377頁 1,700円+税

1953年生まれのチリの人気作家である著者が育ったサンチャゴに近い港湾都市バルパライソには、チリ共産党の古参党员でもある詩人でノーベル文学賞に輝くパブロ・ネルーダの3軒の持ち家の一つがあり、学生時代に街でその姿を見かけたという。

探偵のカジェタノを主人公にしたシリーズの6作目で、1970年の選挙で登場したアジェンデ社会主義政権が経済・社会の混乱から軍部がいつクーデタを起こすかが懸念されていた動乱の時に、カジェタノはアジェンデの盟友でもあったネルーダから癌が進行しているのでその治療のためにある医師を捜して欲しいと頼まれる。あやふやな情報を頼りにメキシコ、キューバ、東ドイツ、さらにチェ・ゲバラ終焉の地ボリビアへとカジェタノは調査に赴くが、その間に捜しているのは医師の夫人で一時期ネルーダと関係を持ち、別れた後に生まれた娘が自分の子かを確認めたいためと目的が明かされ翻弄される。やがて実は医師の元夫人はサンチャゴに住んでいて、東ドイツに女優としている娘の存在に辿り着いたカジェタノの前に姿を現すが、その直後73年9月11日ついに軍と警察軍によるクーデタが勃発、カジェタノは一時軍に拘束されたが、ある勢力の指示で解放され駆けつけた病院でネルーダはすでに息を引き取っていた。

ネルーダの実際の経歴や奔放な女性関係、捜している夫人が東ドイツの諜報活動に関わり、ゲバラの死の時にボリビアにもいたなどのフィクションを、混沌としていた20世紀末のラテンアメリカでの政治情勢を背景に織り込み、最後に意外な人物の種明かしもあって飽きさせないミステリー小説である。

〔桜井 敏浩〕